

(なぜSFなのか?)

奇想天外放談集①

なぜSFなのか?

志	斎	良	筑	夫	横	二	山	豊
正	正	矢	道	柴	田	か	宏	田
光	光	野	夫	野	順	ん	荒	有
瀬	瀬	徹	小	拓	彌	べ	卷	恒
龍	龍	浅	松	美	鏡	む	義	平
石	石	倉	左	星	明	さ	雄	井
上	上	久	京	新	伊	し	田	和
三	三	志	半	一	藤	堀	中	正
登	登	高	村	都	典	晃	光	南

なぜSFなのか？ 奇想天外放談集①

1978年7月10日第1刷発行

著者 豊田有恒, 平井和正
南山 宏, 荒巻義雄
田中光二, 横田順彌
かんべむさし, 堀晃
光瀬 龍, 伊藤典夫
柴野拓美, 星 新一
都筑道夫, 小松左京
半村 良, 浅倉久志
矢野 徹, 高斎 正
石上三登志, 鏡 明

発行者 千 頭 俊 吉
印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 奇想天外社
東京都新宿区赤城元町28番地
電話 (03) 268-8617, 268-8653
振替 東京 3-100293 郵便番号162

(なぜSFなのか?)

奇想天外放談集①

志	斎	良	筑	夫	横	二	山	豊
正	正	矢	道	柴	田	か	安	田
光	光	野	夫	野	順	ん	荒	有
瀬	瀬	徹	小	拓	彌	べ	卷	恒
龍	龍	浅	松	美	鏡	む	義	平
石	石	倉	左	星	明	さ	雄	井
上	上	久	京	新	伊	し	田	和
三	三	志	半	一	藤	堀	中	正
登	登	高	村	都	典	晃	光	南

奇想天外社 0095-1003-1512 880円

（なぜSFなのか？）

奇想天外放談集①



装幀 平野甲賀

目次

一	1
二	2
三	3
四	4
五	5
六	6
七	7
八	8
九	9
十	10
十一	11
十二	12
十三	13
十四	14
十五	15
十六	16
十七	17
十八	18
十九	19
二十	20
二十一	21
二十二	22
二十三	23
二十四	24
二十五	25
二十六	26
二十七	27
二十八	28
二十九	29
三十	30
三十一	31
三十二	32
三十三	33
三十四	34
三十五	35
三十六	36
三十七	37
三十八	38
三十九	39
四十	40
四十一	41
四十二	42
四十三	43
四十四	44
四十五	45
四十六	46
四十七	47
四十八	48
四十九	49
五十	50
五十一	51
五十二	52
五十三	53
五十四	54
五十五	55
五十六	56
五十七	57
五十八	58
五十九	59
六十	60
六十一	61
六十二	62
六十三	63
六十四	64
六十五	65
六十六	66
六十七	67
六十八	68
六十九	69
七十	70
七十一	71
七十二	72
七十三	73
七十四	74
七十五	75
七十六	76
七十七	77
七十八	78
七十九	79
八十	80
八十一	81
八十二	82
八十三	83
八十四	84
八十五	85
八十六	86
八十七	87
八十八	88
八十九	89
九十	90
九十一	91
九十二	92
九十三	93
九十四	94
九十五	95
九十六	96
九十七	97
九十八	98
九十九	99
一百	100

なぜSFなのか？ 9

豊田有恒 平井和正 南山宏

●平井和正氏に25の質問 36

●荒巻義雄氏に25の質問 40

男のロマンとSF 43

荒巻義雄 平井和正 田中光二

●かんべむさし氏に25の質問 69

SFファンからSFプロへ 73

かんべむさし 堀晃 横田順彌 鏡明 平井和正

●横田順彌氏に25の質問 94

SFマインドを考える 97

田中光二 伊藤典夫 柴野拓美

●田中光二氏に25の質問 123

シート・シートとSF

127

星新一 都筑道夫

●都筑道夫氏に25の質問 155

福島正実氏を偲ぶ 161

小松左京 半村良

●小松左京氏に25の質問 183

●半村良氏に25の質問 188

SFのホンヤクについて 191

矢野徹 伊藤典夫 浅倉久志 柴野拓美

●矢野徹氏に25の質問 217

同級生がSFで再会する時 223

高斎正 豊田有恒

●豊田有恒氏に25の質問 249

●高斎正氏に25の質問 252

SF映画の興奮 257

光瀬龍 石上三登志

●光瀬龍氏に25の質問 282

なぜSFなのか？

豊田有恒



平井和正



南山宏



編集部 今回は、雑談風にSFに関する思いのたけを話していただきましょうか。

豊田 石川さんのSFランドという図式は、いまどういうふうにしたらいいたろうね。

平井 一切、いわなくなっちゃったね。

豊田 石川さんがあれを書いた頃は、ぼくはまだ駆けだしだったけど、少しは、ぼくも作った方に回ったと思うんだけど。

平井 当然ですよ。図式的に説明するというのは石川さん独自のやり方ですね。

豊田 そこで、田中光二とかかんべむさしとかを、どう位置づけるか難しくなってきた。

平井 だからやらなくなった。数年の期間でああいうのを作ろうとしたのがムリだったんだろう。ただ、外部に対してこういうもんだとみせるために、仮に作ったモデルだったと思うんだ。

南山 石川さんのビジョンをはみだしちゃってきいたからね。

平井 SFに対する自分の価値感と、読者の価値感が、あまりに違い違ってきたんで、もうしたくないとハッキリしているもの。

豊田 それは、ひとつの見識ですよ。

平井 見識ですよ。それで、自分が作る方へどんどん回っていけばいい。

豊田 作家というのは、ハングリー・アートみたいなところがあるでしょう。イヤ、完全にハングリーということではなくてね。ほかに自分の手についた立派な職があったら、ぼくは作家になれないって気がする。

南山 精神的な意味でのハングリーというのはあるね。

平井 ハングリー・スポーツからきているんでしょう。貧民階級出身者が、富と栄誉を獲得するためにやるわけだ。ところが、SFの場合にはちがうと思うよ。心の中に、訴えたいものがあって、だから書くんだ。

豊田 そこがハングリーなんだよ。別に経済的な金の意味だけではないんだ。精神的な面だね。ほかの面で満たされていて、それが十分受け入れられているものがある人というのは、なかなかないにくだらうね。

たとえば、アイディアの宝庫みたいな有能な人がいる。「宇宙塵」にいた田中春光さんなんか、まさしくそういう人だったけど、自動車販売会社の社長でしょう。そっちの方に比重がとられちゃうから、作家活動ができなかったんだらうけど、作家の方にカケちゃえば、いまごろ作家になっていた人じゃないかな。

平井 ただ、自分がどうしてもそうせざるを得ないと思ったたら作家になっていただらうね。自分の中で占める「比重」だらうな、問題は。

豊田 社長業じゃなかったら、作家になってただらうね、田中さんは。

平井 それは結果論なんだよ。つまり、モノを書く、文章を書く才能が、ぼくなんかよりはるかに秀れた人がいる。ところが作家にはならない。なぜかというところ「使命感」がないんですよ。

ぼくの場合は、「使命感」なんだな。どうしても訴えたいものがあって、自分の非力さ、才能の乏しさは承知の上で、ともかくやってきた。だから、才能というものは、誰でも似たりよったりなんじゃないかね。

豊田 小説家というのは特殊視されているようだけど、そうではなく、それに賭けているかどうかというところ、情念、怨念みたいなものを抱いてまっしぐらに突き進んでいくという、そこらへんの努力

なんじゃないかな。

南山 いいたいものをどれだけ持っているかだね。

平井 内在する原動機みたいなもの、駆りたてるものがあるんだ。

南山 そういう人でないと、あとは言葉の遊びだけになっちゃうね。平井さん、そういう意味で、ニュー・ウェーブを否定するわけでしよう。

平井 創作活動のディレッタンティズムは否定する。遊びは否定しないけど、文学、あるいは芸術というの、遊びじゃないと思うんだ。もっと次元の高等なものじゃないかと。

豊田 文学の定義によるんだ。ぼくはエンターテインメントは、まず文学だと思う。ニュー・ウェーブは、文学性云々といいながら実は、ゲームみたいに言葉を一個一個選んで遊んでいるような気がするんだ。

南山 気になるのは、こうあらねばならないという理屈が先にあって、それにあわせて書いていくような面があるでしょう。あれは内面から突き動かす衝動で書いているようにはみえないね。

平井 ハッター、街い、遊び……そういうものがあまりに歴然としているからぼくはイヤなんだ。

豊田 売名……ね(笑)

平井 アヴァンギャルドを気取っている連中は、裸で銀座の下真中で、オナニーの真似したりするけど、それと似た行為だと思うんだ。

豊田 奇を衒ってやっている、敵は百万人といえどもわれ行かん式に、志をもって書いているのは、全然別でしょう。

平井 志があるなしで、大変な違いがでるよね。できるだけ多くの人に、自分の燃えているものを訴えたいと思った時には、自ずと多くの人に読まれるようなものを書きますよ。

チマチマとした、ディレクタントを気取っている新しがり屋の連中を相手にするのではなくて、もっと広い世界、自分の同志たちに向かって書かなきゃ。

SFの読者というのは、われわれが始めたときには、ホンのひと握りだったでしょう。だけど、内在する潜在的読者というのはもつといるはずだと思ったんだ。だから、たとえば才能がなくてこちらがツブレたとしても、必ず後続部隊がでてくると思っていた。

南山 ジャンルとして、マーケットとして成立していない時期に、あれだけ情熱をもって書けたということは、やっぱりスゴイよね。

豊田 書かなきゃいけないという、なかから突き上げてくるものがあつたね。

平井 それが使命感なんだ。

豊田 だから、当然、文学ですよ。

平井 ひと握りの知的エリートがもて遊ぶものが、文学だと考えるんだとしたら、ぼくは否定せざるを得ない。万人が感動するものが文学なんだ。よく矢野徹さんが「感動！ このひとことに尽きる」と、力説するけど、ぼくは共感します。感動のないものがどうして文学なんだ。

豊田 作者が感動しないものを、読者がなぜ感動するものですか。

平井 馬車馬的に突っ走るところがないと。

豊田 コケの一念、だな（笑）

南山 しかし、功利的な計算が先に立つ人ってのはダメだね。

平井 だいたい、あの枘目を一字一字埋めていくなんて、こんなシンドイことないよ。

豊田 ミジメッタラシイね（笑）

平井 時々思いますよ。なんで、オレはこんなバカなことをしているんだろうと。金儲けが目的だっ

たら、こんなことできないと思うな。競馬で一発当てる方がラクだ（笑）

ぼくが作家になろうと思ったのは、中学二年の時ですね。こういう本を出したいなあというイメージがあつてね。その時、ぼくは作家になることにしたんだ（笑）。豊田さんは小学校五年の時なんだよ、ね？

豊田 そうだよ。五年の時に、SFをいっぱい書いて。

平井 ウマイんだよ、それが。いま、公表するか。

豊田 無くなっちゃったんだよ。どこにいったのかな。

南山 そういえば、ぼくら見たね。いまの豊田さんの原型なんだろうね。字も同じだった（爆笑）

平井 早熟の天才だ。

豊田 小学校のころから、書くものといえばSF以外にはなかった。それと、強いていえば歴史物。

平井 あなたにとっての歴史物というのはSFの処理と同じだからな。やっぱり同じ次元に属するんじゃないの。

豊田 読者は分かれちゃうけど、自分の中では同じだと思うし、矛盾しないよ。

筒井さんをみていて、最近分かったことだけど、ああいうドタバタ物と「幻想の未来」みたいなものと、完全につながっているじゃない。同じ作家が書いているんだから、それは当然なんだろうけど、ぼくらが筒井さんをよく知らない時は、あの作品とこの作品は、全然別みたいな感じがあつたね。

平井 不可解な……。それはそうだね。同一作家が、ああいう風にまったく違ったものを二つに書き分けるなんて、変な感じがしたもの。あの人は二重人格なんじゃないかと。

豊田 最初はそう思うわけですよ。いまのぼくのSFと歴史物もつながらないけど。

平井 処理の仕方っていうのは、SFも歴史物も同じだと思う。
豊田 ぼく自身はそう思って、その延長線上にいるんで……。

SFとマンガ

南山 ぼくの中のUFOにも、異和感を感じる人もいるんだろうな。ぼく自身には、SFと結びつくある必然があったわけだけだ。

何を隠そう、ぼくが小学校六年の時に、SFを書いたといったら平井さんがビククリしていたけど、ほんととは、ぼくは手塚治虫さんに大影響を受けて、同じ書くのでも、マンガを描く方が好きだったんだ。

田舎にいて、マンガの創作法とか作法とかは全然知らなかった。当時、手塚さんはまだ売り出し中だし、でも、ちゃんと本能的にわかっていてね。ワラ半紙きって、手塚さんや福井英一、井上一雄などのマンガ家の作品を全部写したの。まず、模写から始まったんだ。

最初は徹底的な模倣ですよ。自分というものはない。でも、そこから、だんだん手塚流のマンガに片寄っていくわけ。なんとかSFマンガを書きたいと思っていて、受験時代なんだけど、勉強はおっぱりだして、友人と共作でマンガを描き始めたりしてた。これがまた高垣陣の小説と、偶然に同じ題名なんだけど『凍った地球』というマンガで。

あの時『漫画少年』という雑誌があったでしょう。手塚さんが初めて東京へ出てきて、『ジャンクル大帝』を連載したヤツ。ぼくはいわゆる投書マンガ家としては常連でね。同世代に石森章太郎（当時小野寺姓）、山根赤鬼、青鬼、寺田ヒロオなどがいた。石森さんなんかは、さすがに才能で、十回以上も載ったけど、ぼくは確か四回だった。